
アダミノ

多加也 草子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アダミノ

【Nコード】

N3613W

【作者名】

多加也 草子

【あらすじ】

昔々、ある王国の話。小さな村で平和に暮らしていた少女アダミノは、ある時、王の騎士団に家族を殺される。同じく家族を殺されたクロウとその弟カーンと共に、村から逃れ森の奥で生活を始める。そこに修道士が迷い込み4人で暮らすことになった。月日が経ち、アダミノとクロウは復讐の為に、剣の稽古をしていた。ある日、そこに王の一団が現れ、剣の腕を買われアダミノは、城に迎えられることになる。クロウと復讐を誓いながら、優しい王、王妃に迎えられ、アダミノは憧れていた城での生活になじんで行き、復讐相手の

王を愛してしまふ。優しい王が、なぜ家族を殺すと言つて残虐なことをしたのか。そして、アダミノの復讐は達成されるのか。

1・木莓

突然、強い風が西から吹いてきた。

若草の香りと焦げ臭い匂いの混ざったその風は、アダミノを無性に不安にさせた。幼なじみのクロウと丘に駆け上がり、背伸びをして西方を眺めた。ここ、ベルデコリーナより西には大きな森があり、そこを抜けると城壁に囲まれた都があった。焦げた匂いは都から来るのである。黒い煙が見えた。都は今、血で血を洗う状態だと、アダミノの父ハツシュが言っていた。アダミノはベルデコリーナから出たことがない。アダミノは、いつも丘から都を眺め、その中心にそびえたつ城の生活を空想していた。きらきらと光る服を着たハンサムな王様と美しいお后様。笑顔の絶えない臣下たち。豪華な料理に優雅なダンス。お話を聞かせてくれる隣のおばあちゃんから聞いていたお城のイメージはこんなものだった。なのに、血で血を洗うとはどう言う事なのだろう？

「アダミノ！ 都から来た人がお父さんを訪ねて来たよ」

弟のティムがアダミノを迎えに丘を駆け上がって来た。はあはあ息を弾ませていた。

「あのね、うんとね。肩に矢が刺さっていて血を流しているの。りっぱなお馬に乗って来たんだよ」

5歳のティムは矢が刺さった人の話をするのに笑顔を見せた。彼には血を流していると言う事よりも、都から来た人と言う事の方が重要なのだろう。アダミノは不安でクロウの手をぎゅっと握った。クロウはアダミノと同じ10歳なのにアダミノよりも背が低く、やせっぽちで頼りにならない男の子だった。でも、この時はアダミノの手をしっかりと握り返し、アダミノとティムの手を引きながら3人で家路を急いだ。

家の前には確かにりっぱな栗毛色の馬がいた。ティムはキャアキ

ヤアとはしゃぎ声を立てた。3人は急いで家の中に入った。アダミノとティムの母ノアがギョツとした様子で子供たちを見た。家の中はノア1人だけだった。

「都から来た人は？」

ティムの大きな声に、ノアは口到人差し指を当てた。

「静かにしてちょうだい。クロウ、今日は帰ってくれる？ それからティムが何か言ったと思うけれど、それはすべて忘れてしまっただろう。誰にも話さないで欲しいの」

「誰にもって、あの馬が家の前にいるのは目立つよ。すぐに村中に知れ渡るよ」

クロウはそうに言いながら帰って行った。

「おじさんは地下よ。アダミノ、ティム、おじさんの事は誰にも言わないでちょうだい。おじさんは父さんと母さんの古いお友達で、悪い人に追われて逃げて来たの。悪い人がこの村に捜しに来ても見つからないようにしなければならぬの」

アダミノの不安は広がった。悪い人なんて物語の中にしかないのだと思っていたのだ。アダミノはノアに言われて、馬を納屋に隠しに外に出た。美しい毛並みの馬で立派な鞍を載せていたが、腹には主人の血がべつとりと付いていた。納屋で鞍をはずし、血を拭いてあげると馬はうれしそうな顔をした。

「きつと、お前はあのお城に行ったことがあるのでしょうか？ あんな立派な鞍を着けているんだもの」

アダミノは馬に水と餌を与えながら、またお城の美しい世界を夢見ていた。

アダミノが家の中に戻ると、ティムは興奮しすぎて疲れたようでも眠っていた。ハッシュもノアも地下にいるのだろう。アダミノは床に腹ばいになり、耳を床に当てた。

「王が無謀な戦争を始める気なんだ。我々が反対しても聞く耳を持たないんだ。ハッシュよ、7年前、新王に失望を抱き、身を引いたお前を軽蔑して罵った私がお前を頼りにするとはな。許してくれ」

「いいや、何を言うんだ。我々はその昔、国の行く末を夜通し語り合った仲じゃないか。私は貧しい農夫に成り果ててしまったが、ブノフ、君は危険を顧みずに王に意見したんだ。私の方こそ逃げてしまった事を許してくれ」

「君には美しいノアと幼いアダミノがいたんだ。君は家族の幸福を望んでこの村に逃れて来たんだ。それは正しい事だったさ」

ノアのすすり泣く声が聞こえてきた。

「懐かしいわ。あんなにも幸せだったのに。ウィル様が若くして王になられてからは、ウィル様から逃げるように皆がお城からいなくなつて、ついに私たちもここまで逃れて来てしまった。ブノフ、あなたに7年ぶりに再会したのあなたはこの間に傷ついている、何てことでしよう。せめて、何か栄養があるものを食べさせたいのだけれど・・・」

足音が聞こえ、誰かが地下の階段を上ってくるようだったので、アダミノは急いでティムの横に座りティムの髪を優しくなでた。ノアが地下から出て来た。

「アダミノ、森に行って木苺を採って来ておくれ。1番おいしい時期だからね。それぐらいしかお客様を喜ばす物がないからね。いっぱい採って来るんだよ」

「ティムも連れて行くわ」

アダミノはティムの頭をポンと叩いた。ティムは起きそうにない。

「ティムを連れて行くと、遅くなるわよ。1人で行ってちょうだい」
アダミノは1人、麻袋を持って出掛けた。

森の中まで都からの焦げ臭い風が届いていた。

「父さんと母さんがお城にいたことがあるなんて聞いたことがなかった。逃げて来たと言うのだから、内緒にしていたんだきっと。7年前、私は3歳だったのだから覚えてはいるはずもない。私もお城に行つた事があるのかしら？」

アダミノはもう、想像するだけでうれしくなった。アダミノは誰にも教えていない大きな木苺の樹の場所を知っていた。そこには美

しい白蛇がいつも居た。白蛇はどことなく気品があつて、アダミノは「王様」と呼んでいた。今日も王様蛇は樹にしっかりと身体を巻き付けていた。

「こんにちは、王様。少し毒を分けてちょうだいね」

小さな赤い舌を出しながら、王様蛇は少し身体を後退させた。アダミノに摘んでもいいよと言っているかのようであった。アダミノは暗くなる前に帰らなければと、せつせと摘み始めた。麻袋はどんどんと重くなつていく。

「これだけあればジューズも作れるわ。タイムが喜ぶわね。ありがとう王様」

アダミノは王様蛇に笑顔でお礼を言い、帰ろうとした。すると、王様蛇はスルスルと樹から降りて来た。アダミノは王様蛇が自分に噛み付くのではないかと怯えた。王様蛇はアダミノを中心に3回静かに回ると、またスルスルと樹に登った。アダミノは何かおまじないでもされているような不思議な気分のまま帰った。家に近づくとつれ、都からの焦げ臭い匂いが強くなつていった。この匂いはアダミノをとて嫌な気分にした。

「ブノフのように怪我をした人たちが町には大勢いるのかもしれない。戦争が始まったのだわ」

アダミノは急ごうとしたが麻袋が重くて早くは歩けなかった。森の出口でアダミノは唾然とした。焦げ臭い煙で視界が遮られた。何が起こっているのか理解出来ず、家に向かって歩いた。途中、泣いた赤ん坊を抱えたクロウが立っていた。

「何が起こったの？」

クロウは放心状態だった。アダミノがクロウの肩を叩くと彼は静かにアダミノに視線を向けた。

「王様の紋章が入った旗を持った騎士達がやって来て、俺の家の外で『ブノフはいるか』と叫んでいた。父さんが出て行って、その人達と話をしていたんだ。突然、父さんが『逃げる』と叫んだ。母さんが俺に弟を抱かせて裏から出ようとした。騎士達が入って来て母

さんの髪を掴んだ。母さんは裏口に立ち塞がり俺たちに『逃げて』
と言った。俺は夢中でここまで来た。村には火が放たれている」

アダミノは怖くて麻袋を抱き締めた。

「私、家に行くわ」

アダミノは出来る限りの速さで走った。「父さん、母さん、ティム。どうか無事でいて」微かにティムの泣き声が聞こえてくる気がした。しかし、それは幻だった。アダミノの家に火は放たれていなかった。家の前には既に事切れた死体が4体並んでいた。父、母、弟、そしておそらく、客人ブノフのものだろうと思われる首なしの死体。アダミノはまだ麻袋を抱き締めていた。それを放すと自分が正気でなくなる気がした。麻袋は木苺が潰れて真っ赤に染まり、その果汁は滴り落ちていた。

2・森の住民

ベルデコリーナ村の近くの森の中には、円形に作られた広場があり、そこには小さな教会と墓地があった。

5年前、あの無残な事件の後、クロウが領主に無許可で木を切り倒し広場を作ったのだ。深い森の中で村の者しかやって来れない場所だ。クロウはあの日の翌日、荷車にクロウの両親、アダミノの両親とタイムの死体を載せ、赤ん坊の弟カーンと、麻袋を抱え続けているアダミノを乗せ、ここへやって来た。そして、荷車を置き、10日間不眠不休で木を切った。アダミノはカーンが泣き出すと潰れた木苺を与え、それ以外はクロウが木を切るのをただぼうつと眺めていた。その時のクロウに何か計画があった訳ではない。怒りをぶつける場所がなく、ただ、ただ、樵の息子は木を切り続けたのだ。荷車に載せた死体は10日間そのままだった。死体が腐乱し悪臭を放つと、初めてクロウの腕が止まった。クロウは次に棺桶を作り始めた。

「都の奴らや王の手下の目の届く所に家族の墓を置きたくはないんだ。ここに埋めて、俺たちもここで暮らそう」

クロウとアダミノは一緒に墓を作り、3人で暮らす家を作った。小さな丸太小屋だが、神様に見守ってもらえるように、アダミノは屋根にクロスを付けた。

「あんな目に遭っても、まだ神を信じるのか？」

クロウは気に入らないようだったがそのままにした。そして、ある日、森の中でボロの聖職者の服を着た若い男が倒れているのを見つけた。その男はサンと言った。アダミノが水を与えると彼は元氣を取り戻した。サンは都から来た聖職者だった。反ウィル王体制の貴族たちを抹殺する為に都にも火が放たれ多くの人々が死んでいると言っていた。

「私も落着くまでここに居させてもらいたい」

サンは子供たちだけで暮らすこの地に腰を落着けた。サンは貴族で王の幼なじみだったそうだ。王の剣の相手もしていたそうだが、やはりウィル王のやり方に疑問を持ち、貴族としてそのうち刃を罪のない者に向けることになるのではと懸念して、聖職者になったのだそうだ。

そして5年の間、4人の森の住民は誰の抑圧も受けずに生活して来た。クロウはいつかウィル王に復讐すると言い、アダミノと共にサンに剣を習った。サンは剣よりも学問が大切だと2人に両方を教えた。カーンはまだ6歳だと言うのにサンの持つている聖書に夢中になった。アダミノは森の美しい空気で育った為か、森の精霊に愛された為か、柔らかい栗毛色の髪、美しい強気な瞳、麗しい唇の美女に育った。クロウの剣の相手をしているので傷が絶えないが野生的にスルリと伸びた肢体を持つていた。クロウは樵の父譲りの強靱な筋肉を持ち、闇のように黒い瞳と髪を持った若者に成長した。サンはやっと30歳を過ぎた年齢だったが、若者たちに自分の知識を教え、森の精霊たちの気を吸収していくにつれ、隠者の物静かさや悟りを持った者にしか現れない優雅さを身に付けていた。クロウは復讐に取り付かれ、アダミノもそれに洗脳されていた。2人の剣の稽古は激しく、サンを既に超えていた。彼らはサンに言われなければ美しい森の木々や空を見上げることはなかった。カーンだけがサンと共に耳を澄まし、木々の音を聞き、鳥たちの鳴き声の変化に気が付いた。サンは時々、国の政情を知る為に旅に出た。

サンが出掛けて留守のある朝、カーンが言った。

「人が大勢こちらに向かってくる」

アダミノもクロウもそんな事は信じなかった。ここに来てからと言うものサンが迷い込んで来ただけで、誰も来た事がなかった。その日もアダミノとクロウは剣の稽古に夢中だった。カーンは森の中から広場のアダミノとクロウを見ている大勢の人たちを感じていた

が、小屋の扉に寄り掛かり、静かに彼らを見守っていた。クロウが手に汗をかいて剣をわずかに滑らせた。その隙にアダミノは鋭くクロウの頬の横に剣を刺した。その瞬間、拍手が起こった。その拍手はだんだんと大勢の音になった。2人は驚いて見回した。木々の間から馬に跨った男たちが湧いて出て来た。カーンはうれしそうに2人に近づいた。

「僕の言った事、本当だったでしょう？」

クロウはカーンを引き寄せ、アダミノと背中合わせに剣を構えた。装束から見ると貴族たちであろう。狩に来たようで、皆、弓矢を背負っていた。その中で1番美しい濃紺の服に身を包んだ男が部下らしい男に何か小声で囁いた。部下の男は馬から降りると3人に近づいた。

「ここで暮らしているのか？」

クロウはじつと睨み答えない。

「僕たちは修行しているの」

カーンが落着き払って言った。

「何を修行しているんだい？」

「サンの知識をすべて教わるの。そしていつか復讐……」

カーンの口をクロウは押さえた。アダミノはカーンの代わりに話し出した。

「村で病気が流行り、家族が死に、残った者だけで病気から逃れる為にここまで来たのです。今は出掛けていますが、聖職者がここに住み着いてくれましたので、私たちは救いを求めて、そちらの方面の修行をしているのです。救いを求める事が家族を奪った病気への復讐なんだと、この子には言っていて聞かせているのです」

濃紺の服の男が前に出て来た。

「それでは剣は必要ないであろう」

クロウは上目遣いに男を睨んだ。

「その聖職者は剣が出来ますので教わりましたら私たちは夢中になつてしまい、今のようになっているのです」

濃紺の男は穏やかな視線でクロウの鋭い眼光を見た後、アダミノに視線を移した。

「女剣士よ、なかなかの使い手と見た。私は城に住む者だ。なかなか物騒でね。もし良ければ、私の後の護衛になってくれないか？君がいれば安心だ」

クロウの手に力が入るのを感じた。アダミノは素早くその手を押し返した。

「もしや、あなたはウィル様？」

「いかにも。狩場でこんな娘と出会えるとは思っていなかった。突然の申し出ですまないが、考えてはくれぬか？それから、そちらの若者、君もなかなかの腕だ。城に来て、護衛官になってはくれぬか？」

「俺は樵ザクの息子。王に仕える言われは無い」

「王に向かつてなんて口を利く」

従者の1人がクロウに駆け寄ろうとしたが、ウィルはそれを制した。

「女剣士よ、そなたはどうする？」

ウィル王の言葉にクロウはアダミノを見た。クロウの瞳には憎しみしかなかった。

「私はお供します」

クロウはアダミノの胸倉を掴み小声で言った。

「何を言い出す？ 親の敵に身を売ると言うのか？」

「いいえ、ねえ聞いて。復讐するにはまず近づかないと」

アダミノはクロウの腕を強く掴んだ。

「若者よ、女性に手荒なまねはしてはいけない。人それぞれに道を選ぶ権利はあるものだ。剣の相手が欲しければ、時々、城へ来ればよい。女剣士よ、決して悪いようにはしない」

ウィル王の言葉にアダミノは笑顔を向けた。そして、クロウに囁いた。

「私はうまくやるわ。あなたはカーンと一緒に時々は私に会いに来

て。私は絶対にうまくやる」
アダミノは剣だけを持つと、従者の馬に跨った。

3・城へ

ウィル王の1団は50騎はいるだろう。その1番後ろに付いたアダミノは森からの道すがら従者にウィル王について色々聞き出そうとした。暴君なのだから従者もさぞ不満だろうと思っていたのだ。しかし、若い従者はウィル王に使えて3年だが、とてもいい王で身分の低い自分たちにも気を掛けてくれる優しい人だと言うのだ。

「でも、5年前は大勢の罪の無い人たちがウィル様の命令で殺されたと聞いています。私はずっと恐ろしい王様だと思っていました」
「ええ、確かにそんな事があつたと私も聞いております。側近を皆殺しにしてしまつたらしい事も聞いています。私はそれが信じられないくらい良い方ですよ」

従者は先頭を走るウィル王の背中を眩しそうに目を細めながら見ていた。

「ああ、そう言えば、ウィル様が変わつたのはクラレッタ様のお陰だと聞いた事があります」

「クラレッタ様って？」

その時、視界が開けた。薄暗い森から出て前には広大な麦の畑が広がっていた。その金色の平原の向こうには城壁が見えた。その城壁の奥にはアダミノが幼い頃に夢見た城があるのだ。アダミノは早く城に行きたくて、思わず馬の腹を蹴った。馬が大きく前足をあげていななき、隊列からはずれて走り始めた。

「何をするんです」

「ごめんなさい。つい興奮してしまつたわ。私は都に行くのが初めてなので」

従者が急いで馬を制したが、既に先頭のウィル王の真横まで走ってきてしまった。

「はは、そんなに楽しみなのか？ では先頭に行くが良い」

ウィル王が馬の尻を鞭で叩いた。アダミノと従者の乗った馬はス

ピードを上げて黄金の大地を進んでいった。アダミノはもう夢中であつた。早く早くと馬を急ぎ立てた。城壁の門が開かれてアダミノは驚いた。大勢の人が道いっぱい溢れ、道の脇には店が続いていた。果物や野菜、肉に酒、衣服や壺、武器などが店先に連なっている。人々は陽気に言葉を交わし、笑顔が広がっていた。アダミノは馬を制止させ、この穏やかな光景をただ呆然と眺めるだけであつた。「どうした？ 我らが目指すは正面にある城ぞ。後ろがつかえている。さあ、進みなさい」

ウイル王が追いついて来て正面を指した。アダミノはその指す方向に目を向けた。ああ、城だ。父も母もその昔、あそこに行った事があるのだ。なんとりっぱな城だろう。

「さあ、城にはクラレッタ様が待つていらつしやる。クラレッタ様にお仕えするとはなんと幸せな事でしょう。行きますよ」

従者も笑顔で城を指し、馬を走らせた。アダミノが近づくと城の門はゆつくりと開いた。そこにはアダミノが夢見た美しい城が間近にあつた。庭は色とりどりの花が敷き詰められ、その奥に城の入り口があり、そこには数人のりっぱな服を着た男女が立っていた。その中央にとても品のある女性が立っていた。

「麗しきクラレッタ様ですぞ」

従者は馬を脇に寄せ、ウイル王を待った。ウイル王はすぐ後ろからやって来て、まっすぐに中央の女性の前に進んだ。

「お帰りなさいませ。狩はいかがでしたか？」

「お前の護衛を連れてきた」

ウイル王はアダミノを手招きした。

「狩に行って私の護衛を連れてきたなんて、また不思議な事」

クラレッタは、微笑みながらアダミノを見つめた。

「アダミノと申します」

アダミノは進み出て挨拶をした。王の后がこんな優しい目をしていることに驚いた。

「森の中で若い男と剣の稽古をしていたんだ。なかなかの腕前だ。」

お前はよく忍びで城外に出るからな、彼女を付ければ私も文句は言わん」

ウィル王がそうに言うと、クラレッタの横にいた小柄な男が一步前に出た。

「森の中で見つけてきたなどと、素性をきちんと調べないといけません」

「モリス、病気で両親を亡くしたかわいそうな娘だ。それで十分だろっ」

ウィル王はモリスと言う男に面倒そうに言った。その言葉を聞いたクラレッタがアダミノに近づき手を取った。

「かわいそうな方なのね。身内の方はいないの？」

「はい、弟も両親と同じ病気で亡くなりました」

アダミノは久しぶりに最後に見た弟の寝顔を思い出した。あの時、無理やりにも起こして一緒に木苺を採りに出かけていればと悔やんでいた。不意に、アダミノはクラレッタに抱き締められた。

「まだ、お若いのにね。かわいそうだわ」

アダミノは、久しぶりに人の温もりを感じた。サンはよくカーンを抱き締めていた。人の温もりを感じ、鼓動を感じることは大切だと言っていた。クロウはそれを拒否し、アダミノにも人の温もりを感じることを拒否させた。人の温かさを知ると復讐心が薄れてしまふと思っていたのだ。アダミノはクラレッタの心臓の鼓動を感じた。そして、母を思い出した。

「王の言うとおり、私を守ってくださいね。今日から城の皆があなたの身内よ」

「お、お言葉、ありがとうございます」

アダミノはこの言葉を発するのがやっとだった。

アダミノは表向きは侍女として働き、クラレッタの護衛をすることなった。城にはたくさんのお侍女がいる。まずはクラレッタの第一侍女の二ナに付き、侍女としての仕事を覚えることになった。二

ナは侍女になつて30年のベテランである。アダミノは二ナと同じ部屋を与えられた。古いがきれいに整えられた部屋だ。

「今日は疲れたでしょう。湯で体を洗い、休みなさい」

二ナもまた優しくそうな母のような人だった。二ナはお湯を持ってきて、たらいに入れてくれた。二ナに言われるがままに湯を浴びた。「傷やアザだらけなこと」

二ナはアダミノの体を拭きながら驚いていた。アダミノは二ナが両親を知っているかもしれないと思いながら黙っていた。アダミノの頭にはいろいろなことが渦巻いていた。ウィル王に復讐をすることが目的でやってきたはずであった。しかし、憧れていた城に入り、優しくそうなクラレッタに会った。ウィル王を殺すとクラレッタを悲しませることになると思い、心が揺らいだ。ここに長居したらクラレッタの情に流されてしまふであろう。ウィル王を殺害するのは急がなければならぬ。

「あんたに似た人を知っている」

ふと、二ナが言った。

「えっ！」

「ノア様は、もう生きてやしないだろうけどね」

二ナは母ノアを知っているのだ。アダミノは唇を噛み締めた。涙が出そうだった。私は母に似ているのだ。でも、気が付かれてはいけない。ウィル王に反対して去った者が両親だと気が付かれてはいけない。

「クラレッタ様とウィル様は仲が良いのですか？」

アダミノは話題を変えようとした。

「ああ、仲が良いことは国中に広がっていると聞いていたが、あんな知らないのかい？」

「ええ、今まで森の中で人にあまり会わないで暮らしたものですから」

「へえー。そりゃあもう、ウィル様がベタ惚れだよ。ウィル様は5年前までは他人の言うことなんか聞かない人だったけれどね、クラ

レッタ様に会われてからお優しくなった。私も5年前まではいつ殺されるかと思っていたからね。今じゃ、いい国王様になられたわ。この国の民は皆、幸せだろうよ」

「そうなんです」

アダミノは更に複雑な気分になった。

「さあ、きれいになったよ。明日からは早く一人立ちできるようにがんばってもらうからね」

「ありがとうございます」

アダミノは服を着て与えられたベッドに横になった。

これから城での生活が始まる。「そうだ、侍女をしながらウィル王を殺せるチャンスをつかがおう。確実に殺せるように、ウィル王の護衛官の隙を狙えるようにしなければならぬ。クロウによくやったと言わせてやるわ」そんなことを考えながら、アダミノは城での初めての眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3613w/>

アダミノ

2011年10月2日03時34分発行